

概要報告

実施期日	令和8年8月3日(月)
部会名	小学校 特別支援教育部会

研究主題

個々の子どもの困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫

テーマ

『自己決定力を目指す特別支援のあり方』

提案概要

知的障害級、病弱・身体虚弱級、情緒障害級に所属する10名（4～6年生）が主体となって、社会科見学『カップヌードルミュージアムに行こう』を計画し、実行するプロセスを通じて、自己決定力と協働的な課題解決能力を育成する取組が行われ、児童は大きな達成感を得るとともに、自己有用感を高めることにつながった。

児童の実態として、課題に対して「やりたくない」と否定的な反応を示す傾向があった。また、自分の思いを優先し、一方的な関わりになりやすい、感情のコントロールや自己表現力、状況に応じたコミュニケーションに課題が見られた。そこで実体験を通した学びから、「気になる」「やってみたい」という思いを形にする力や同じ場面でも人によって考え方や気持ちが違うことに気づくことなど、相手を理解しようとする姿勢を育成することをねらいとした。

特別支援学校学習指導要領の生活の内容「カ 役割」や「ク 金銭の扱い」、自立活動の内容「3. 人間関係の形成」における「ア 他者とのかかわりの基礎に関すること」および「6. コミュニケーション」における「オ 状況に応じたコミュニケーションに関すること」と関連している。

実践内容

（1）児童が主体となる社会見学の計画

「自分たちで計画した社会科見学を実現すること」を児童の目標に設定し、児童が主体となって活動を計画・準備できるようにした。社会科見学の目的や活動内容、役割分担や活動計画、公共交通機関の利用方法なども児童同士で話し合い、共有・検討することで、責任をもって活動する意識を高めた。

（2）社会見学実現に向けた準備

社会科見学実現に向け、自分たちの思いを校長に直接説明するため、タブレット端末を使い、目的や安全面、期待される学びを整理し、ネットワークを介してプレゼンテーション資料を共同制作した。校長へのプレゼンテーションを経て、社会科見学を実現させたことで、大きな達成感を共有できた。

（3）社会見学当日の学び

社会科見学当日も、自己決定や学びの場面が多く見られた。電車内での体調不良や乗り継ぎの遅れなど、予定外の事態が発生した際も、児童自身が状況を判断した。教員は支援を最小限に留め、判断の機会を保障した。当日、通常学級(以下、交流級)の体育授業への参加を希望した児童1名に対しても、その「自己決定」を尊重し、学校に残る判断を認める柔軟な対応を取った。

（4）学びの振り返り

社会科見学後も一連の活動を振り返り、資料作成や意見交流を通して、ともに学びを深めた。また、学びを発展させ、個々の好奇心を起点とした次の探究活動を展開する姿に主体的な学びが表れていた。児童の好奇心や身近にあるものを学習材とした自立活動を、今後も続けたいと締めている。

本実践では、学校全体をインクルーシブな環境にしていくフルインクルーシブな取組の視点がいくつか挙げられた。特別支援学級(以下、支援級)の児童をあくまで交流級の一員として捉え、帰属意識の醸成を図ること。そのために、自立活動の特別な授業時間は確保せず、授業の合間や個人の時間を利用して主体的に活動させていること。活動支援教室を、サロンのように全ての児童がくつろげる居場所(学習室)として機能させ、支援級児童の特別視を避ける環境を構築していること。また、教員の役割の変化と連携として、支援教員が交流級のT2として全児童を支援するほか、教科によっては支援教員がT1となり、

交流級担任が支援に回るなどの工夫を行っていること。このように支援級と交流級の境界をなくしたいという考えのもと、隔たりや特別視を生まない環境・風土づくりの定着と継続が進められている。

質疑応答

- ・「近隣の小中学校との交流があったら教えてほしい。」➡教師間の交流は、まだ具体的には実現していない。話をする程度である。児童同士のつながりがあり、2年前にはオンラインで児童の交流を週1回行った。
- ・「長期目標は個別の指導目標におけるどの部分なのか。」➡個別指導計画の長期目標に基づいている。
- ・「カップヌードルミュージアム以外にも児童の興味に基づき、学校として他にも行っているのか。」➡さまざまな場所への見学を計画して行っている。
- ・「交流級の子が『僕たちは行けないの?』と言った場合、どのように対応しているのか。」➡調理した食べ物を一口ずつ、交流級に提供するなど、支援級の活動が交流級の子たちのメリットになるようにしている。
- ・「交流級でのT1とT2の入れ替えを他の支援級教員も行っているのか。」➡基本的に全員が行っている。学校長の方針として教科担任制のように行っているが、教員に強制はしていない。

協議の柱及び協議概要

【協議の柱…インクルーシブな学校の実現に向けて、特別支援教育ができること。】

(1)グループ協議 小中混合の6名、計9グループ《20分》

4つのキーワード(①～④)を観点として協議した。自校の取組などを紹介し、各グループで付箋を用いて整理した。

《①学校で行っている個別の支援》《②教材の工夫》《③支援につなげていく環境づくり》
《④様々な「つなぐ」ための支援策》

(2)ワールドカフェ方式で、前後半10分ずつ発表《20分》

(3)(2)で聞いた他グループの内容をもとのグループで共有《20分》

《以下グループ協議のまとめ》

- ①電子黒板や漢字のルビ、声かけの仕方やスモールステップなどの手立てが挙げられた。
- ②授業のUD化や視覚的支援のある教材、タイマーの使用などが挙げられた。
- ③集中やクールダウンのできる空間の確保、児童に合わせた学習用具の用意が挙げられた。
- ④交流の在り方、互いに学び合えるバランス、教職員間・外部機関・保護者・小中学校との連携、情報共有の重要性が挙げられた。

※その他にも大人が手を出さずに見守る、待つなど、自立を目指した考えが出た。また、交流級との交流の仕方、交流のねらい、学び合いとのバランスの重要性が挙げられた。一方、フルインクルーシブのメリット・デメリット、個別のニーズと集団のバランスをどう取るか、進路の問題、人員や時間が足りないこと、支援級と支援学校の難しさや保護者との共有理解の課題、時間割調整の難しさ、教員間のインクルーシブへの理解の差、1人だけ特別扱いはできないこと(平等感)などの悩みや課題も挙げられた。

まとめ概要

今回の実践では、子どもの自己決定力の育成と、教員の協働によるインクルーシブな学びの保障を大切にして取り組んだ。その中で、子どもが自分の願いを言葉にし、自分にあった役割を選び、仲間と協働し、振り返り、次の学びという学びのプロセスを大切にすることができた。これは、学習指導要領が示す「自立活動」の考え方とも重なる。また、自立活動を通して、育まれた自己決定や他者とのかかわりが、各教科における資質・能力を支える役割となっていると考える。

今後も、各学校で、子ども一人ひとりの理解を教職員で共有して、支援級にかぎらず、通常の学級でも子どもが自ら考え、選択し、振り返る機会を保障していくことが重要である。こうした取り組みを積み重ね、支援級と交流級の壁のない学校文化、「ともに学びともに育つこと」インクルーシブ教育をさらに進めていきたい。